

青年期から育児期における母親の親性獲得過程と その育成に関する支援について

Development process of a mother's parenthood from adolescence to childcare
and support for fostering parenthood

宗 杏佳音
Akane So

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：親性の発達、親支援、虐待予防

Key words : Development of parenthood, Parental support, Abuse prevention

1. 研究目的

近年、児童虐待は社会問題として非常に多くのニュースで取り上げられている。児童相談所における児童虐待相談対応件数として、令和元年度では193,780件(速報値)となり、増加する一方にある。増え続ける児童虐待問題に対し、近年、子どもを産む前からの虐待予防として「親性」「親性準備性」といった親になるための心性や子どもを育てる能力が注目されている。

親性とは、研究によって多少定義は異なるが、全ての人が持っているものであり、女性と男性に共通する、自己を愛し尊重しながら他者(子ども)に対しても慈しみやいたわりを持つ性質と定義されている。ライフステージとともに発達し、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される(大橋・浅野,2009)。また親性準備性とは、親性の形成過程において親となる以前から段階的に形成される資質(佐々木ら,2011)と定義され、親性準備性から親性への連続した発達が指摘されている。先行研究を概観すると、親性・親性準備性の研究の多くは青年期や妊娠期、育児期というように、発達段階ごとの構成要素や影響要因、支援効果を明らかにしていた。しかし、実際に各段階で得られた知識や経験、支援によって培われた親性準備性から親性への発達過程を明らかにした縦断的な研究は見られなかった。また、現在行われている親性・親性準備性を高める支援が、特に親のどのような側面(認知、感情、行動等)に影響しているかを詳細に検討した研究も数少なかった。そこで本研究では、大橋・浅野の親性と、

佐々木らの親性準備性の定義に則り、親性の発達を「出生時から育児期にあたる現在までに、親性準備性を土台とした親としての心性・能力が発達する過程」と定義し、子育ての担い手となりやすい母親を対象に、親になる以前から育児期における母親の親性の発達過程と、親性を高める支援との関連を明らかにすることを目的とした。本研究を行うことで、より効果的な支援方法や支援の介入時期を考察することが可能となり、虐待予防の一助となるだろう。

2. 研究実施内容

調査対象者：20歳以上の初産後2年以上5年未満の母親4名(平均年齢37歳)

Table1 調査対象者の概要

	年齢	調査対象者の職業	初産時の年齢	家庭内での立ち位置	現在の子どもの人数
A	38	専門職	33	妹	3
B	39	専門職	36	姉	1
C	38	専門職	35	姉	1
D	33	専門職	30	姉	2

調査期間：2020年9月～2020年11月

調査方法：半構造化面接法によるビデオ通話でのインタビュー調査を1名に対して3回(平均72.2分)

調査内容：大橋・浅野(2010)の親性尺度と佐々木(2007)の親性準備性尺度の質問項目を基にインタビューガイドを作成し、親になる以前では「乳幼児や小さな子どもと触れ合った経験」「他人の子どもに対する認識」「子育てに対するイメージ」、妊娠期では「乳幼児や小さな子どもと触れ合った

経験」「子育てに対するイメージ」「自分の子どもに対する認識」「他人の子どもに対する認識」、育児期では「自分の子どもに対する認識」「現在の自分の子育てに対する認識」「親としての充実感」「親として以外での充実感」を質問項目とし、それぞれの時期における対象者の経験や感想を振り返り語ってもらった。

分析方法：時間の流れに沿って個人の親性準備性から親性の発達過程を検討するために、本研究では複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下 TEA) による質的分析を用いた。

尚、本研究は大妻女子大学研究倫理審査委員会の承認(番号: 02-015)を受けて実施された。

結果と考察

親性の発達：TEA による分析の結果、母親の親性は6つの段階を経て発達することが明らかとなった。すなわち、まず、親になる以前に①誰かの面倒を見る経験を通して子育て能力の土台を作り、②子育てをする側へ視点が移行することで、③徐々に子育ての当事者意識を持つ。そして、妊娠すると④子どもを産み育てる親として準備をし始める。出産後は⑤子育ての理想と現実に葛藤しながらも子育てに奮闘し、⑥自分なりの子育て観を確立する、の6段階である。また、発達の様相は①～③と④～⑥の段階により異なった。妊娠以前の①～③の段階では、個人によって多様な発達の径路が見られるが、④～⑥の妊娠以降では多様な発達の経路は見られず、親性の発達に類似性があることが明らかとなった。

さらに、親性は親となる個人内の要因だけでなく、経験の有無や周囲の環境の影響を受けながら段階的に発達することが明らかとなった。親になる以前ではきょうだいや赤ちゃん、小さな子どもの面倒を見る経験の有無や、子どもと身近に関われる環境が大きく影響しており、それらを肯定的に捉えられることが課題になると考えられる。育児期では、子ども自身の成長の影響を受けて母親の親性も発達する相互の関係にあり、子から親への信頼感だけでなく、親から子への信頼感を抱けることが親性を発達させる上で重要であると推察された。

親性を育成する支援：妊娠以前では乳幼児との接触経験を増やし、体験を肯定的に捉えられるような意味付けを行うことや、家庭外でも良い親・育

児モデルを見る経験を増やすことが親性を育成する支援であると考えられる。妊娠・育児期では公的支援による相談の機会だけでなく、同じ地域の母親と繋がる機会を積極的に設けることで孤立化を防ぎ、第三者の意見を気兼ねなく聞けること、ひいては育児に余裕を持てるような支援を行うことが重要である。

3. まとめと今後の課題

本研究は、これまで仮定されていた親性準備性から親性までの連続性と、親性が6段階を経て発達することを明らかにした。本結果は、これまでの親性研究では見られなかった新たな知見と言える。また6段階に分けたことにより、親性発達の多様性や共通性が明らかとなり、それぞれの時期に行う望ましい支援の妥当性を具体的に検討することが可能となった。加えて、調査対象者の4名とも現状の子育て生活に満足がいつている状態、すなわち親性が高い状態であったが、育児期において十分なソーシャルサポートや公的支援を受けられず、余裕のない子育てが続いた場合、子育てを後悔する、不安に思うことが予想された。このような状態が悪化すると、虐待のリスク要因にも繋がると考えられることから、親性を高めることは虐待のリスクを低減させる一助になると示唆された。

今後の課題として、調査対象者の全員が子どもと関わる職に就いており、職業上、子どもへの理解や支援に関する情報を多く有していた。そのため、特に就職後の親性の発達過程には偏りがあると考えられる。また、本研究では母親のみを対象としたものであり、父親の親性の発達過程を検討するものではない。しかし、特に妊娠期では母親と父親での経験が非常に異なり、親性の発達過程は大きく異なることが予想される。母親の親性の発達に加えて父親のそれを明らかにし、これらの関連を詳細に検討することで、より効果的な支援方法や支援の介入時期を考察することが可能となり、虐待予防の一助となるだろう。

4. 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和2年度大学院生研究助成(B)課題番号DB2018「青年期から育児期における母親の親性獲得過程とその育成に関する支援について」を受けて行った。